

文京町 No.1 遺跡

(仮称)けやきウォーク前橋新美工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006.3

前橋市教育委員会



AE390748出の堤防崩壊(東から)



1. 前橋市内より浅間山を望む



2. 調査区遠景（南東より）



3. 調査区全景（南東より）



4. 基本土層（A区）

はじめに

前橋市の北にそびえる赤城山は、往古から人々ととかかわりが深く、親しまれ愛される逍遙の山であります。その悠々と裾野を広げる台地を中心として、岩宿遺跡で知られるように旧石器時代から開けてきた地域で、いたるところで旧石器時代や縄文時代の遺跡が発見されています。

古代において前橋台地を中心に、800余りの古墳が築造されました。東国古墳文化の中心地をして栄え、今でも9基もの国史跡指定となる古墳が存在します。続く律令制の時代に入ると、総社古墳群から連綿と続く山王廃寺、上野国分僧寺、上野国分尼寺、上野国府など「クニ」の中核施設が次々に造られ、政治・宗教・学問の中心として繁栄いたしました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずつた地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

近代では、横浜港が開港されると、輸出の花形商品として生糸をもって一番乗りしたのが、前橋の糸商人でした。前橋は、藩をあげて蚕糸に力を注ぎ、我が国初の製糸の機械化に取り組みました。生糸により横浜と前橋は結ばれ、まさに「シルクロード」となり文化交流が始まりました。このように本市は、歴史溢れる豊かなまちです。

本報告書に掲載いたしました文京町No.1遺跡の発掘調査は（仮称）けやきウォーク前橋新築工事に伴うものです。発掘調査によって、平安時代1108年の浅間火山大噴火によってもたらされた火山降下物によって覆われた水田跡を10面以上検出できました。さらに、平安時代に施工された条里制の痕跡を示す坪畦畔である大畦畔の発見もあり、今後、研究を進めて行く上で貴重な資料を収集することができました。

発掘調査にあたりましては、ご協力をいただきましたユニー株式会社開発本部をはじめ鹿島建設株式会社（仮称）けやきウォーク前橋新築工事事務所、調査に従事されました方々に厚く御礼申し上げます。

なお、本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成18年3月

前橋市教育委員会

教育長 中澤充裕

例　　言

1. 本報告書はユニー株式会社が計画する（仮称）けやきウォーク前橋新築工事に伴う文京町 No.1 遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の遺跡コードは 17H40 である。
3. 発掘調査および整理作業は前橋市教育委員会の指導のもと、技研測量設計株式会社が担当した。
4. 発掘調査の事項は下記の通りである。

遺跡所在地	群馬県前橋市文京町 2 丁目 1-53		
発掘調査期間	平成 18 年 2 月 6 日～平成 18 年 2 月 25 日		
調査面積	3,300 m ²		
整理・報告書作成期間	平成 18 年 2 月 27 日～平成 18 年 3 月 24 日		
委託者	ユニー株式会社	代表取締役社長	佐々木孝治
受託者	前橋市教育委員会	教育長	中澤充裕
発掘・整理担当者	前橋市教育委員会	小嶋 尚	前田和昭
	技研測量設計株式会社		
5.	本書の原稿執筆・編集は小嶋・前田が行った。執筆分担は I を小嶋、他を前田が担当した。		
6.	発掘調査および整理作業参加者は以下のとおりである。		
【発掘調査】	遠藤逸子 大川悦子 女屋みどり 犀野良夫 小島京子 佐藤政雄 佐藤初子 白石悦子 高木克己 竹澤賢司 田部井美砂子 富田完三 馬場克己 堀越晴子 本多和子		
【整理作業】	藏持大輔 土屋一未 中村岳彦 石田 喬 草処裕美 福島絢子		
7.	発掘調査で出土した遺物および、図面等の資料は前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。		
8.	発掘調査から本書刊行まで、下記の諸氏、並びに機間に有益な御指導、御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）		
	梅澤重昭 早田 勉 桜岡正信 山下歳信 東海ビジネス開発（株）		

凡　　例

1. 全体図および遺構図の方針は北に座標北を表し、国家座標 IX 系を使用している。
2. 掘図に国土地理院発行 1/50,000 「前橋」「高崎」を使用した。
3. 遺物番号、掘図、観察表、写真図版とともに統一してある。
4. 土層遺物の色調は農林水産省農林水産技術會議事務局監修、日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に拠る。
5. トーン は掘削面下、太線は遺構面を示す。
6. 本書における火山噴出物の表記は略号を用いた。浅間柏川テフラは As-Kk、浅間 B 軽石は As-B、榛名二ツ岳渋川テフラは Hr-FA、浅間 C 軽石は As-C とした。
7. 各遺構、土層断面図の I ~ IX 層は、基本土層に準じ、それ以外の土層については個別に記載した。
8. 本書記載の土層断面図の縮尺はすべて 1/60 である。

目 次

はじめに

例言

凡例

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の立地と環境	1
III. 調査の経過と方法	4
IV. 基本層序	4
V. 道構と出土遺物	5
1. 平安時代の水田	5
2. 耕作痕	6
3. 道構外出土遺物	6
VI. 成果と課題	9

挿図目次

第1図 遺跡位置および周辺遺跡分布図	2	第8図 As-B軽石下水田平面図	7.8
第2図 グリット設定図	4	第9図 B区東壁断面図	7.8
第3図 基本土層図	4	第10図 As-B軽石下水田畦畔断面図	7.8
第4図 As-B下水田水口断面図	5	第11図 条里模式図	9
第5図 As-B下水田出土遺物	5	第12図 現地表の条里地割と坪境模式図	9
第6図 B区耕作痕平面図、断面図	6	第13図 坪内区画図	10
第7図 道構外出土遺物	6	第14図 周辺の遺跡と条里地割想定図	13.14

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	3	第3表 As-B下水田出土遺物観察表	5
第2表 調査経過	4	第4表 道構外出土遺物観察表	6

写真図版目次

A区西側（北東から）	12	畦畔S P K - K'（東から）	12
水口S P B - B'（南から）	12	耕作痕（南から）	12
水田遺物No1（熙寧元寶）	12	道構外出土遺物（柄頭）	12



As-B地区下水田全景（南東より）

I. 調査に至る経緯

本開発予定地については、平成15年8月に当時の土地所有者であるダイハツ車体株式会社から試掘調査依頼を受け、調査を実施したところ溝1条を検出した。しかし、開発面積に対して試掘調査面積が狭小であったことから、開発段階毎に工事立会い等を実施する合意がなされていた。そこで、平成18年1月に既存の建物解体にあたり、立会調査等を実施したところ大部分は地下数mまで掘削を受けており遺構・遺物は検出されなかつた。しかし、店舗建設予定地南側部分については現地形が良好に保存されていたため、平安時代の水田跡を検出した。よって、遺跡地であることが確認されたため、店舗建設前に発掘調査を実施することになった。

平成18年2月3日ユニー株式会社 代表取締役社長 佐々木 孝治 より、(仮称)けやきウォーク前橋新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。本市教育委員会ではこれを受け、店舗建設予定地南側の調査を実施した。なお、現地調査は本市教育委員会の指導のもと、技研測量設計株式会社(代表取締役社長 鶴田 大和)が担当した。

II. 遺跡の立地と環境

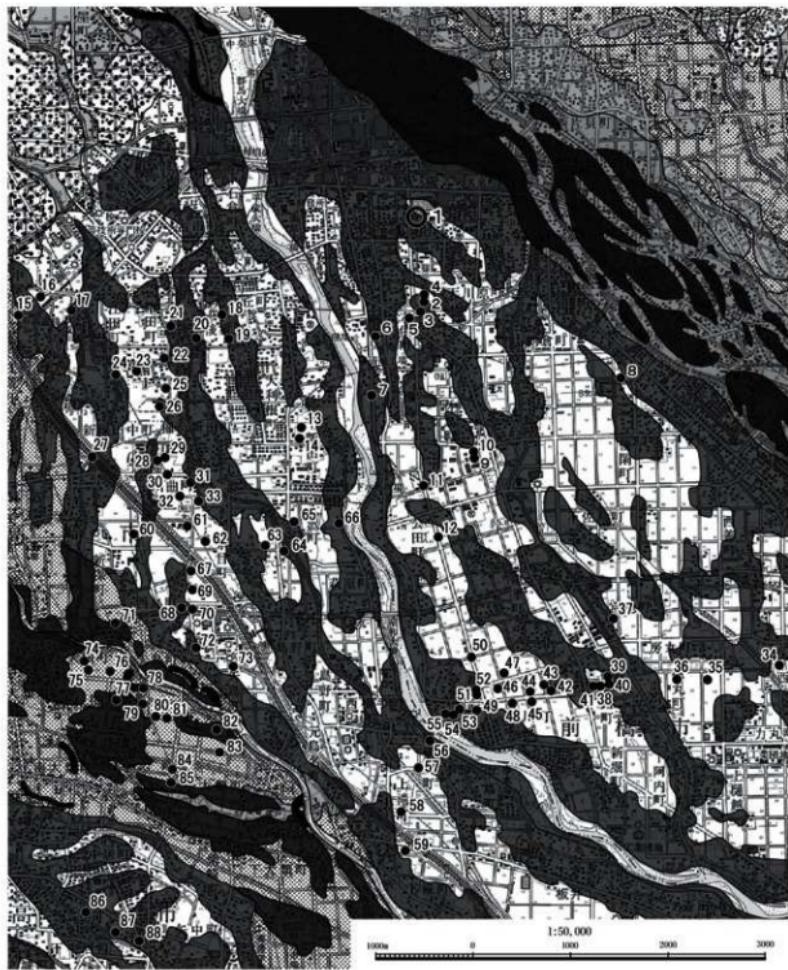
文京町No.1遺跡は前橋市文京町2丁目1-53に所在し、前橋市役所から直線距離約1.8kmに位置する。戦前には中島飛行機小泉製作所(邑楽郡大泉町)の前橋分工場として、主に航空機の主脚や油圧部品を生産していた。戦になると、一時GHQによって接收され米軍駐屯地となったが、後にダイハツ車体の本社工場として、軽商用車の生産が行われていた。JR前橋駅に近接していることから、周辺は市街地化・開発が進み、県立生涯学習センターや県立文書館などの公共施設と住宅街が遺跡周辺を取り巻くように立ち並んでいる。

本遺跡は約24,000年前の浅間山噴火を起因とする火山泥流堆積物と、それを被覆する水成ローム層から成り立つ前橋台地上に位置し、東は広瀬川低地帯と直線的な崖で画され、北西には榛名山麓東南域に広がる相馬ヶ原扇状地の端部が迫っている。利根川東岸部の前橋台地の水系は、主な河川として本遺跡地の東方1.1kmに端気川、1.4kmには広瀬川があるが、これらは利根川から分岐して、前橋台地を東南流している。なお、利根川が現在の流路となったのは天文年間(1540年頃)以降であり、それ以前は遺跡地の東側を東南流しており、現在の広瀬川が旧利根川の最終河道にある。付近の地形を詳細に見てみると、中小河川によって形成された帯状の微高地と、それに付随する後背湿地から成っており、標高は調査区付近で約97mから98mで北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。旧利根川およびそこから分岐した中小河川に挟まれた立地から、古代から水利については恵まれた環境であったと思われる。

本遺跡の所在する前橋台地は、稲作が盛んな地域であると同時に、発掘調査においても水田跡検出事例が多い地域である。本遺跡の北東4.2kmに関越自動車道建設、圃場整備により調査された日高遺跡がある。この調査で、横倉興一はAs-Bに覆われた平安時代後期の水田を方格地割りによる条里水田として検討し、検出した畦畔を条里水田の区画である、坪(一町)境の大畠畔交点とした。これを契機として、B下水田と条里制との関係が注目されることとなる。前橋市域では六供町の区画整理事業や北関東自動車道、県道前橋長瀬線バイパス整備等に伴う調査で、多くの当該期の遺構が検出している。

参考・引用文献

- (1) 前橋市史編さん委員会 1971『前橋市史』第1巻
- (2) 群馬県史編さん委員会 1990・1991『群馬県史』通史編1・2
- (3) 前橋市教育委員会 1993『前橋市埋蔵文化財調査地一覧表』
- (4) 高崎市市史編さん委員会 2000『新編高崎市史』資料編2



(Fc) 畳状地(後期更新後半)
 (Bd) 河成段丘(後背湿地・完新世)
 (Cd) 河成段丘(計中州・完新世)
 (Dd) 井野川泥流堆積面
 (Yc) 広瀬川低地帯のⅡ中州(Aa-B降灰後)
 (Tb) 広瀬川低地帯の後背湿地(Aa-B降灰後)

(Jp) 前構・伊勢崎台地上の後背地
 (Vp) 谷底平野および後背湿地
 (Tp) 前構・伊勢崎台地上の後背湿地
 (Op) 小谷流水堆積面(大湖火碎流)
 (Pd) 畠状堆(完新世)
 (Rd) 旧河道

第1図 遺跡位置および周辺遺跡分布図

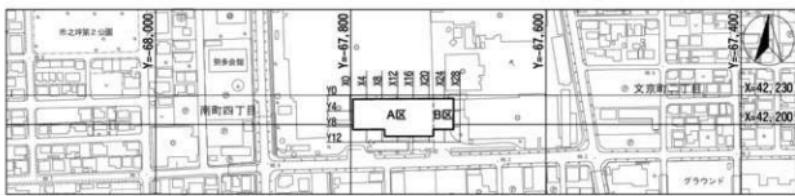
第1表 周辺跡遺跡一覧表

	Ax-C	Bx-F	Bx-FP	Ax-B
1 文部町No.1				○
2 六條下堂木ノ道跡	○			○ 「六條下堂木ノ道跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
3 六條下堂木ノ道跡				○ 「六條下堂木ノ道跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
4 六條下堂木ノ道跡				○ 「六條下堂木ノ道跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
5 六條東京寺等遺跡				○ 「六條東京寺等遺跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
6 中門門柱跡				○ 「中門門柱跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
7 総門門柱跡	○	○	○	○ 「総門門柱跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
8 旗門門柱跡				○ 「旗門門柱跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
9 上島町中村前通跡				○ 「上島町中村前通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 96
10 上島町中村前通跡				○ 「上島町中村前通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
11 金城東山道跡				○ 「金城東山道跡」 兵庫県立博物館・同県立美術館・群馬県埋蔵文化財発掘調査会 97
12 金城東山道跡				○ 「金城東山道跡」 兵庫県立博物館・同県立美術館・群馬県埋蔵文化財発掘調査会 98
13 下田原町中村通跡				○ 「下田原町中村通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
14 下田原町中村通跡				○ 「下田原町中村通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
15 日高道跡（群馬県立美術館）	○			○ 「日高道跡（群馬県立美術館）」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 92
16 日高道跡（高崎市立美術館）	○	○		○ 「日高道跡（高崎市立美術館）」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 29 80 82 82
17 猪俣古跡				○ 「猪俣古跡」 高崎市教育委員会
18 五条川道跡				○ 「五条川道跡」 高崎市教育委員会・高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
19 五条川正道跡				○ 「五条川正道跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 96
20 村内通跡		○		○ 「村内通跡」 高崎市教育委員会・高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
21 佐野町中村通跡				○ 「佐野町中村通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
22 佐野町村内通跡				○ 「佐野町村内通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
23 西田原町中村通跡				○ 「西田原町中村通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
24 新田原町中村前通跡	○	○		○ 「新田原町中村前通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
25 桐原町通跡				○ 「桐原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
26 南田原町通跡				○ 「南田原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
27 新田原町通跡	○	○		○ 「新田原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
28 柳原町通跡				○ 「柳原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
29 山田島勢通跡				○
30 川原柳橋付近通跡				○ 「川原柳橋付近通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 95
31 地藏院通跡				○ 「地藏院通跡」 高崎市教育委員会・高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
32 川原柳橋付近通跡				○
33 川原柳橋付近通跡				○
34 西田原町河岸通跡				○ 「西田原町河岸通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
35 健軍町御所跡				○ 「健軍町御所跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
36 健軍町御所跡				○ 「健軍町御所跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
37 宮内中田通跡				○ 「宮内中田通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
38 西田原町通跡	○	○		○ 「西田原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 92
39 西田原町通跡				○ 「西田原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
40 西田原町通跡				○ 「西田原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
41 村内通跡		○		○ 「村内通跡（村内通跡）」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 92
42 梅原路筋引通跡				○ 「梅原路筋引通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
43 丸尾通免左通跡				○ 「丸尾通免左通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 95
44 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡（西用ノ通跡）」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
45 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡（西用ノ通跡）」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
46 亀井西面通跡				○ 「亀井西面通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
47 亀井中通跡				○ 「亀井中通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
48 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 98
49 桜の塚田原通跡	○	○		○ 「桜の塚田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 92
50 丸尾平塙通跡				○ 「丸尾平塙通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 91
51 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 91
52 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 91
53 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 91
54 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 91
55 桜の塚田原通跡				○ 「桜の塚田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 91
56 西田原町通跡				○ 「西田原町通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 91
57 桜原千三郎通跡				○ 「桜原千三郎通跡（西田原町通跡）」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 93
58 上島通跡				○ 「上島通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 92
59 仁和寺通跡				○ 「仁和寺通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
60 仁和寺通跡				○ 「仁和寺通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
61 仁和寺通跡				○ 「仁和寺通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
62 仁和寺通跡				○ 「仁和寺通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
63 京田久保一・大曾根一・鶴一・小畠通跡				○ 「京田久保一・大曾根一・鶴一・小畠通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 93
64 京田久保一・大曾根一・西用通跡				○ 「京田久保一・大曾根一・西用通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 99
65 大曾根通跡				○ 「大曾根通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
66 蔵原通跡				○ 「蔵原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 93
67 岩原一・二・三通跡				○ 「岩原一・二・三通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
68 岩原大曾根通跡				○ 「岩原大曾根通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 90
69 岩原大石通跡				○ 「岩原大石通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
70 岩原大石通跡				○ 「岩原大石通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 97
71 新八坂通跡				○ 「新八坂通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 92
72 大曾根二・四通跡				○ 「大曾根二・四通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
73 大曾根五・七通跡				○ 「大曾根五・七通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
74 大曾根九通跡				○ 「大曾根九通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
75 大曾根十通跡				○ 「大曾根十通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
76 村内通跡				○ 「村内通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
77 村内通・村東通跡				○ 「村内通・村東通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
78 鳥居吹子一・吹子二・吹子三通跡				○ 「鳥居吹子一・吹子二・吹子三通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 96
79 山田通跡				○ 「山田通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 93
80 天神通跡				○ 「天神通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 93
81 天神保一・保二通跡				○ 「天神保一・保二通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 84
82 万葉寺通跡				○ 「万葉寺通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
83 信頼寺通跡				○ 「信頼寺通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94
84 南大曾根通跡				○ 「南大曾根通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 96
85 南大曾根通跡				○ 「南大曾根通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 96
86 西用・櫛原・吹子・西用通跡				○ 「西用・櫛原・吹子・西用通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 96
87 新田原・吹子・吹子二・新田原通跡				○ 「新田原・吹子・吹子二・新田原通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 95
88 亂原・雷山・吉士塚山通跡				○ 「乱原・雷山・吉士塚山通跡」 高崎市埋蔵文化財発掘調査会 94

III. 調査の経過と方法

調査箇所は東西 100m、南北 40m の店舗建設部分約 4,000 m²である。調査区の呼称については、調査範囲の位置、形状から西側および中央を A 区、工区入り口部分を B 区とした。グリッドについては国家座標系に基づき設置し、4 m を基本単位とした。また、経線を X、緯線を Y として、北西隅を基点に番付し、呼称とした。X 0・Y 0 の公共座標は第Ⅷ系 + 42230.0 m (X) - 67800.0 m (Y)、緯度 36° 22' 41" 6169、経度 139° 04' 39" 6270、子午線収差角 26° 53' 6"、縮尺係数 0.999956 である。調査方法は A 区から表土掘削・遺構確認・方眼杭打ち等測量・遺構掘り下げ・遺構精査・測量および全景撮影の順序で行うこととした。

図面作成については、電子平板、トータル・ステーションを用いた器機測量を使用した。写真記録は 35mm モノクロ・リバーサル、デジタルカメラの 3 種類を使用し、ヘリコプターによる空中撮影も実施した。



第2図 グリッド設定図 (S = 1 : 5,000)

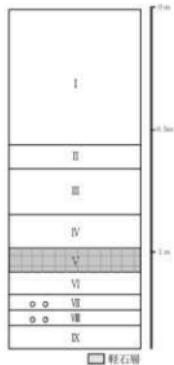
第2表 調査経過

	2/6	2/7	2/8	2/9	2/10	2/11	2/12	2/13	2/14	2/15	2/16	2/17	2/18	2/19	2/20	2/21	2/22	2/23	2/24	2/25
A区																				
B区																				
表土掘削																				
軽石掘下																				
遺構精査																				
写真撮影																				
測量																				

IV. 基本層序

本遺跡の層序は、場所により堆積状況の若干の相違はあるが、主に A 区北壁を基本層序として観察した。

- I 層 搾乱。
- II 層 暗灰色土 (10YR4/1) 緩まり有り、粘性弱い、白色粒（径 3mm 程度）少量含む。
- III 層 黒褐色土 (10YR3/1) 緩まり有り、粘性弱い、白色粒（径 3mm 程度）、As-B 軽石を共に少量含む。II 層と III 層の混土層。
- IV 層 灰褐色土 (10YR4/2) 緩まり有り、粘性弱い、As-B 軽石混土層。
- V 層 暗灰色 (10YR4/1) ~ 暗褐色輕石層 (10YR4/4) As-B 軽石一次堆積層。上位にあたる灰赤色火山灰層は部分的に残存する。
- VI 層 黑褐色粘質土 (10YR2/2) 緩まり有り、粘性やや強い、As-B 軽石下水田耕作土。
- VII 層 暗灰色土 (10YR5/1) 緩まり有り、粘性やや有り、As-C (径 2 ~ 5mm) 微量含む。
- VIII 層 黑褐色土 (10YR3/1) 緩まり有り、粘性弱い、As-C (径 2 ~ 5mm) 少量含む。
- IX 層 暗灰色土 (10YR4/1) 緩まり有り、粘性強い、ややシルト質。



第3図 基本土層図

V. 遺構と出土遺物

1. 平安時代の水田

被覆層と水田の残存状況 A区西端からX22ラインにわたって、合計19面検出された。As-B軽石一次堆積層は厚さ3~12cmで、水田面を直接覆っており、上位にあたる灰赤色火山灰も部分的にはあるが残っている。なお、B軽石の上層にAs-Kkは確認できなかった。部分的に著しく搅乱されているものの、水田面の残存状況は比較的良好であり、畦畔の高さは最大9cmである。

水田城の地形 水田確認面は北から南へ緩やかに低くなっている、約10m間隔で南北間が2.8cmの比高差がある。A区、X6~10付近は谷状にやや下がっており、中央部は他の水田面と比較して約10cm低くなっている。利根川西岸の川曲柳橋II遺跡では、同様な水田面地形の下位からAs-CおよびHr-FAが堆積した埋没谷が検出しているが、本遺跡では水田面を覆うB軽石の堆積厚が均一であることから、後世の沈下の可能性もあり、判然としない。B区X22以東は、北東に向かって緩やかに地形が上がっており、遺構面は削平されているが、現況でもB区中央付近で水田面との比高差は20cm近くあることから、開田されていなかった可能性が高い。

畦畔の走向と区画 畦畔の走向軸は、ほぼ東西、南北となっており、調査区内を横断、縦断する主な畦畔は南北9条、東西7条である。Y9ラインを東西に走向する畦畔は、上幅75~105cm、下幅105~150cm、高さ7cmと他の畦畔と比較して大型である。X22ライン付近を南北に走向する畦畔は、水田域と微高地を境界する畦畔であり、接続する東西に走向する畦畔は3条検出しているが、北西に緩やかに上がる地形の制約を受けているため、すべて北西方向に斜行している。

耕作土 水田耕作土表層に、耕作が行われなかつたことを示す黒色帶ではなく、軽石降下直前まで水田として使用されていたと考えられる。

取配水の方法 水口はA区4箇所検出している。水田間の配水は水口が少ないことから、オーバーフローによる懸け流し灌漑も併用したと考えられる。溝等の水田への取配水の施設は検出しなかつた。しかしながら、それだけでは台地上の配水をまかないきれないことは明白であり、調査区外の水路の存在を想定する必要がある。

足跡 人や牛馬と推定できる足跡を一部検出したが、遺存状態が悪いために、その形質的な特徴や歩行状況などは不明である。

出土遺物 畦畔直上から、遺物上面をAs-B軽石に覆われた状態で、北宋銭「熙寧元寶」が出土した。



第4図 As-B下水田水口断面図



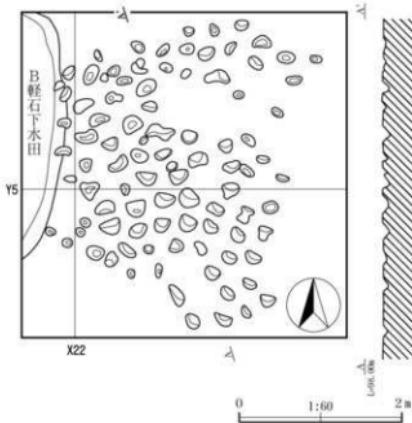
第5図 As-B下水田出土遺物

第3表 As-B下水田出土遺物観察表

No.	出土位置	銭種名	国名	初鑄年代	材質	外径	穿径	厚さ	重量	備考
I	A区畦畔直上	熙寧元寶	北宋	1068年	銅	24.2mm	6.9mm	1.4mm	2.7g	書体=真書

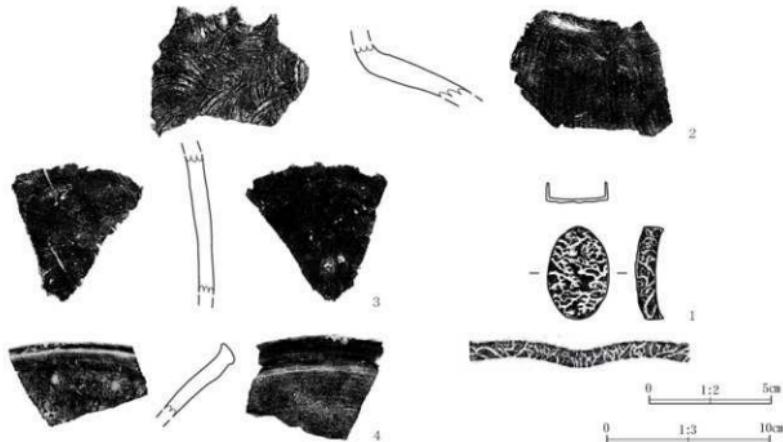
2. 耕作痕

B区において、B軽石下水田範囲外のほぼ全域に検出したが、残存状況が良好な地点を中心にして4mのトレンチを設定して掘り下げを行った。耕作痕中の土は、B軽石（V層）とB軽石混土層（IV層）が混入しており、B軽石混土層より上位にあったと考えられる耕作面は、後世の搅乱により削平されている。形状から鉄製農具（鋤）により、南側から耕作を行ったと考えられる。出土遺物はない。



第6図 B区耕作痕平面図、断面図

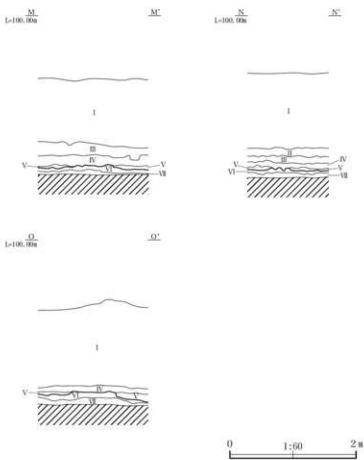
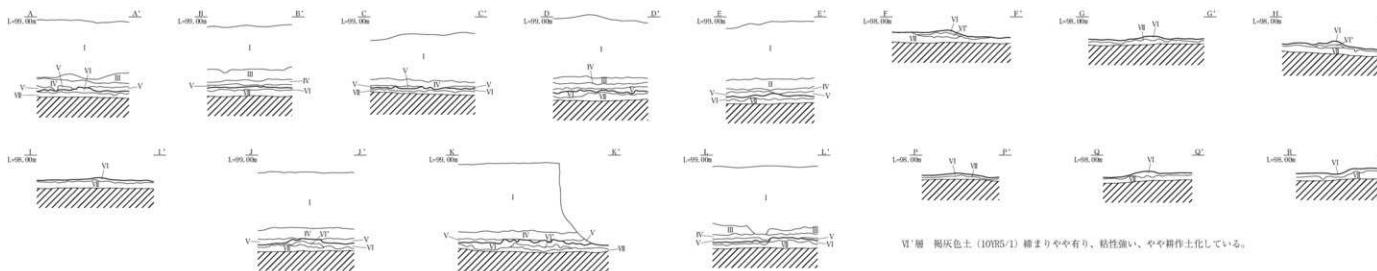
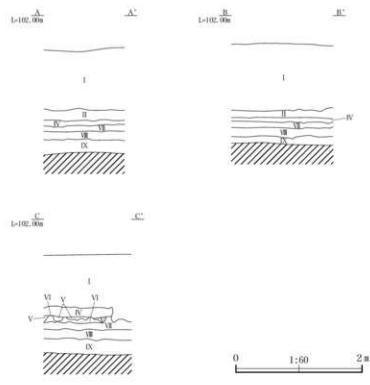
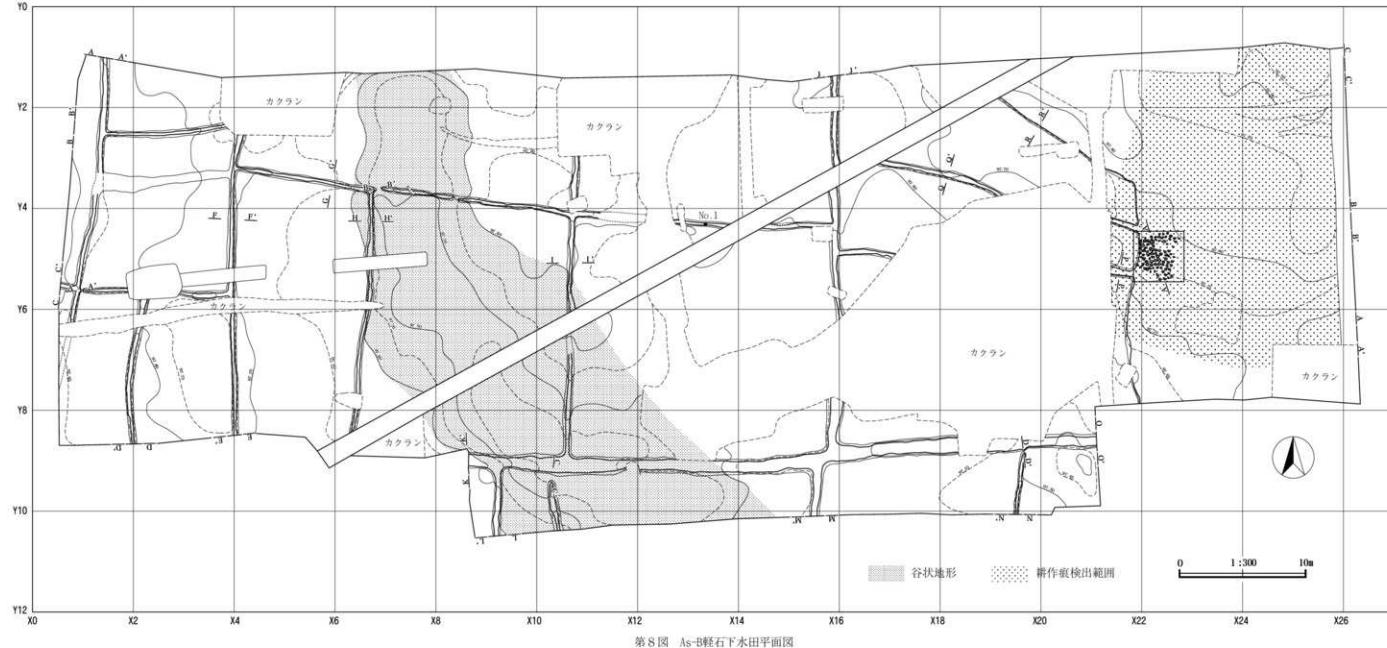
3. 遺構外出土遺物



第7図 遺構外出土遺物

第4表 遺構外出土遺物観察表

No.	出土位置	種類	部位	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	B区IV層上面	刀装具	柄頭	銅	3.8cm	2.5cm	0.8cm	9.1g	文様=波渦図、外面に黒漆が残存、近世
No.	出土位置	種類	器種	計測値					器形、成・整形、文様等の特徴 残存状況 備考
2	A区南側IV層	須恵器	甕	①胎土 ②焼成 ③色調					外面：輪積成形後平行叩き 内部：同心円当て具根 腹部から上部はナデ調整、平安時代
3	B区IV層	須恵器	甕	①乳白色鉢物 ②良好	3.2cm				頭～肩部破片
3	B区IV層	須恵器	甕	①きめ細かい ②やや不良	8.6cm				外面部：輪積成形後叩き、瀬で 内面部：輪積成形後叩き、瀬で 良く叩き締めてあり、器壁薄い、平安時代
4	B区IV層上面	須恵器	鉢	①黒色鉢物 ②良好	4.5cm				頭部正表面剥落、中世
				②10YR5/1					口縁部破片



VI. 成果と課題

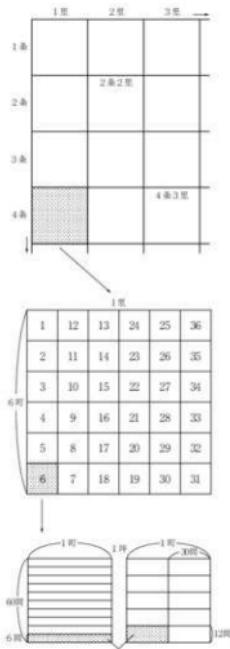
本遺跡では右大臣藤原宗忠の日記『中右記』のなかで、「(前略) 従今年七月二十一日猛火焼山嶺、其煙属天沙礫満國、燐燧積庭、国内田畠依之已以降滅亡、一國之災未有事此事(後略)」と記載されている1108年(天仁元年)降下の浅間B軽石に覆われた水田跡が確認された。この時代の水田跡を検討するに当たって、切り離せないのが条里制である。ここではまず、条里制について解説した上で、本遺跡を条里的視点から検討していきたい。

条里制について

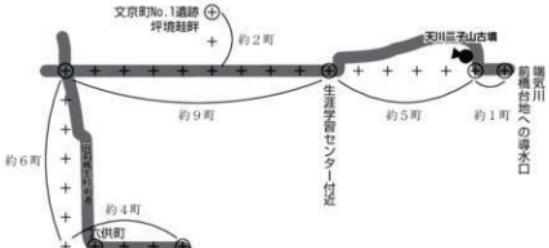
古代においては1町(約109m)四方を単位とする方格地割が実施されており、それを条里地割と呼んでいる。基本となる一辺の長さを1町とする正方形の範囲を坪と呼び、これを縦横に6個ずつ並べた6町(約654m)四方の区画を里と呼ぶ。この里の東西方向の並びを条、南北方向の並びを里とそれぞれ呼んでいる。そして一坪のなかは10分割されて、1区画を段とした。10分割の方法は、細長い区画を10列並べる「長地型」と、まず半分にしてから5分割する「半折型」がある。(第11図) この条里地割に基づいて耕地開拓が行われたと考えられており、条と里と坪を使い「何条何里何坪」と言えば、住所の様に広い地域でも正確に位置を表現することができる。これを条里呼称法という。近年の研究によれば、条里地割とそれに結合した土地表示システムである条里呼称法が導入・整備されたのは、三世一身法(養老7年、723年)や懇田永世私財法(天平15年、743年)などにより、私領としての懇田が急増したことに対応するためのことと考えられ、8世紀の中頃とされている。⁽¹⁾

坪境について

それでは本遺跡の場合はどうであろうか。坪境を検討するにあたっては、明治18年に作製された第一軍管地方二万分の一迅速測圖原圖(迅速図)を使用した。第14図は都市計画図(1:5,000)上に座標に基づいて各遺跡を配置し、迅速図を重ねたものであるが、一見しただけで条里的地割が良く残っていることがわかる。⁽²⁾梅澤重昭によると、本遺跡の東方約1.1kmを南流する端氣川は、高度な灌漑技術により旧利根川から台地の縁を河岸に沿って導水したもので、迅速図による坪区画の検討から、前橋台地の条里制耕地の開発に伴って改修あるいは開削されたとしている。そこで端氣川の導水口を



第11図 条里模式図



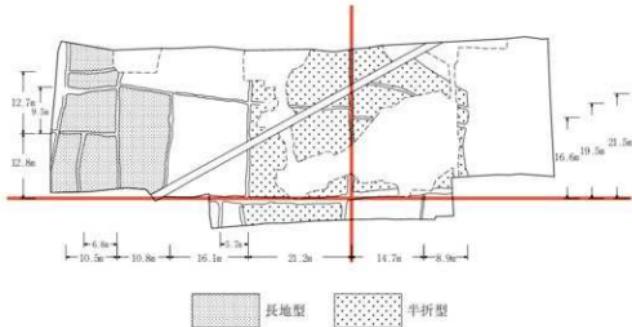
第12図 現地表の条里地割と坪境模式図

基点とすると、1町西の天川二子山古墳手前で道は北へ向かうが、5町先（現在の県立生涯学習センター付近）で再び条里地割と一致する。そのまま9町ほど軸線上を進むと、旧前橋玉村街道と交差する。そこから東へ1町、南へ6町南下すると、現在の六供町交差点付近となり、さらに3町ほど東へ向かい、そこで再び南方へと下っていく。（第12図参照）

以上、地表の条里型地割との比較から、本遺跡においてはY9付近を東西に走向する畦畔とX16ラインを南北に走向する畦畔が坪境となる可能性がある。

坪内区画について

第13図において、坪境と想定される畦畔交点を基準として、各坪内畦畔の位置関係および計測値を図示した。これによると調査区西側は長地型となっており、坪境畦畔交点周辺は半折型となっている。X6～10付近の谷状地形は、地盤の沈下によるものか自然地形を起因としたものは判然としないが、現状の計測値からは長地型・半折型のどちらにもあてはまらない。坪交点北東側、微高地との境から、等高線に沿う形で北西に斜行する3条の畦畔がある。12間の半折型を維持しつつも、微高地と隣接する地形を巧みに利用した水田形態が窺える。また、その地形の制約を受けた故に、今回検出したAs-B輕石下水田は、長地・半折型の折衷となったことも想定できるのではないだろうか。



第13図 坪内区画図 (S=1:1,000)

おわりに

本遺跡では表層の条里型地割との比較、検討により、坪境の可能性がある畦畔が交差する形で2本検出した。遺跡周辺は市街化していることからも調査事例は多いとはいえないが、今後の調査事例の増加により、検出畦畔の座標値を使用した、より精度の高い条里地割の検証、前橋台地南部や現利根川西岸との比較、中小河川や道と条里地割との関連など検討すべき課題も多いが、本報告が水田研究の一助になれば幸いである。

註

- (1) 金田章裕 1985 「条里と村落の歴史地理学的研究」大明堂
- (2) 迅速図は性質上、正確な座標値、道幅や距離を示すものではないことから、あくまで図上に遺存する条里的地割との比較にのみ用いたことをあらかじめ断っておきたい。今後、各地点の調査と正確な測量成果が必要と考える。
- (3) 調査時に御教示頂いた。

参考文献

- 岡田隆夫 1991「特論 上野国の条里制」『群馬県史』通史編2
- 横倉興一 2000「概説 古代の水田・畠」『新編高崎市史』資料編2 原始・古代II
- 横倉興一・山村 孝 2003「浅間山の噴火と古代水田」『新編高崎市史』通史編1
- 大江正行他 1982『日高遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 林喜久夫 1983『後園Ⅱ遺跡』前橋市教育委員会
- 鵜木晋一・江部 和彦 1984『中大門遺跡』明和ゴム工業株式会社
- 友廣哲也 1988『新保遺跡Ⅲ(奈良、平安時代)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 相澤建史・小島敦子 1990『新保田中村前遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂口好孝・佐藤則和 1996『六供下堂木Ⅱ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 下城 正・追川佳子・大西雅広 1997『櫛鳥川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団
- 坂口好孝・佐藤則和 1997『宮地中田遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 坂田祐二・佐藤則和 1998『上佐島中原前遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 吉田聖二・林 信也 1998『六供中京安寺遺跡・六供下堂木Ⅲ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 吉田聖二・高山 刚 1999『六供東京安寺遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 荻野博巳 1999『六供下堂木V遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 小峰 駿・大崎和久 2003『上佐島中原前Ⅱ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 新井 仁 2001「群馬県における平安時代の水田開発について」『研究紀要』19(財)群馬県埋蔵文化財調査 事業団
- 梅澤重昭 1987「条里遺跡と利根川の変流」『日本の古代遺跡』16 群馬東部 保育社
- 田中 雄 2002「群馬県条里研究資料の収集と解題」『研究紀要』20(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中島直樹・吉澤 学 2004「群馬県玉村町における条里地割の復元」『東国史論』19 群馬考古学研究会



A区西側（北東から）



畦畔S P K - K' (東から)



水口S P B - B' (南から)



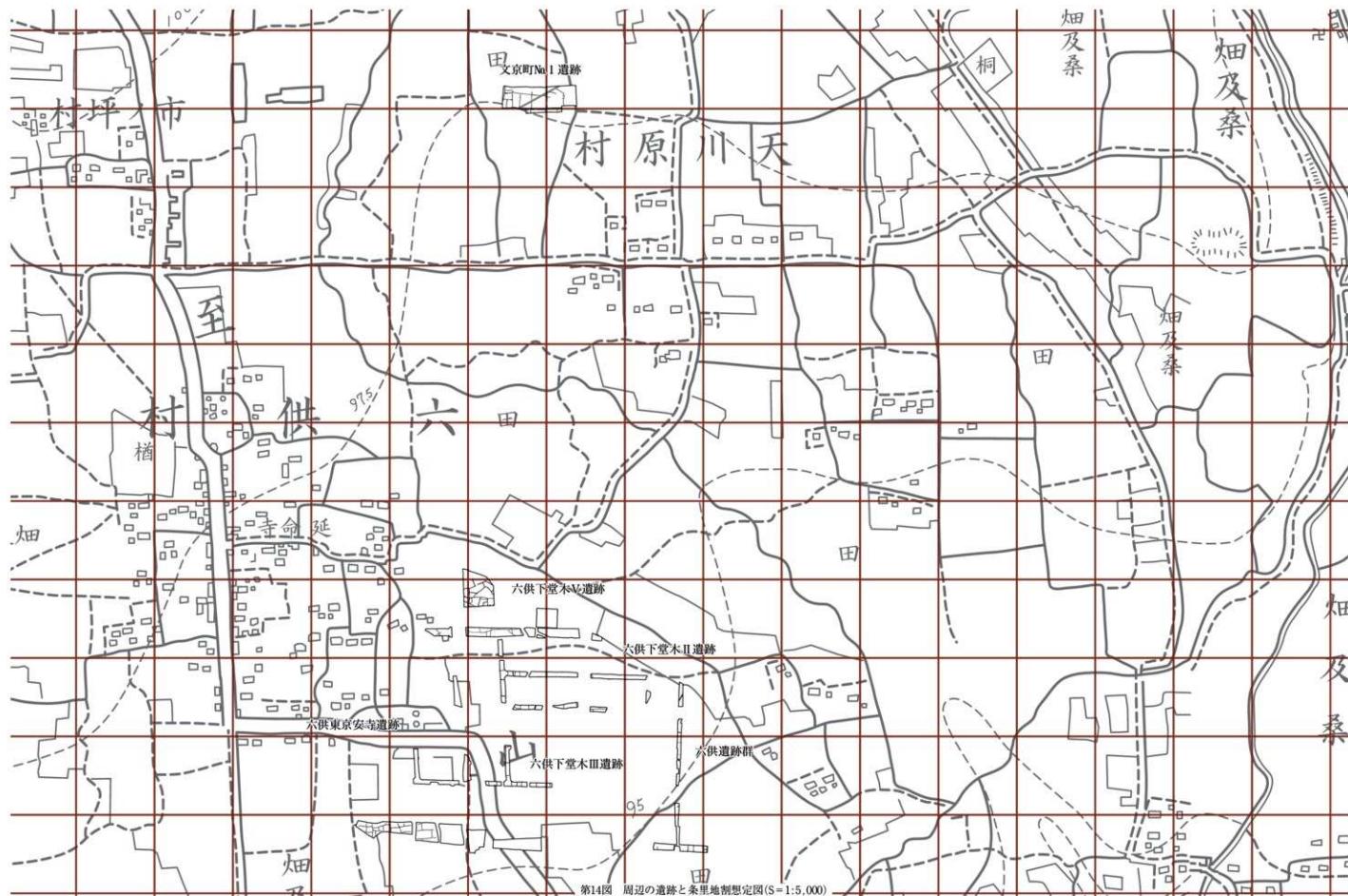
耕作痕 (南から)



水田遺物No 1 (熊寧元寶)



遺構外出土遺物 (柄頭)



第14図 周辺の遺跡と条里地割想定図(S=1:5,000)

報告書抄録

フリガナ	ブンキョウチヨウナンバーワンイセキ
書名	文京町No.1遺跡
調書名	(仮称)けやきウォーク前橋新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小鶴 荘・前田和昭
編集機関	技研測量設計株式会社
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	前橋市三俣町2-10-2
発行年月日	西暦2006年3月24日

所収遺跡名	フリガナ	コード	位置		調査期間	調査面積	調査原因	
			所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東經	
ブンキョウチヨウナンバーワン 文京町No.1	マエハシ-ブンキョウチヨウ 前橋市文京町2丁目1-53	10201	17H40	36°22'29"	139°04'51"	20060206 20060225	3,300m ²	(仮称)けやき ウォーク前橋 新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
文京町No.1	水田跡	平安時代	水田跡	北宋錢(熙寧元寶)	条里方格地割の遺存する As-B下水田跡

(仮称)けやきウォーク前橋新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

文京町 No.1 遺跡 (17H40)

2006年3月20日 印刷
2006年3月24日 発行

発行

前橋市教育委員会

前橋市三俣町2丁目10-2

TEL 027-231-9531

編集
印刷

技研測量設計株式会社

日本特急印刷株式会社

